

寄稿 2

北ぶらくり丁商店街 「明るい未来」

和歌山市北ぶらくり丁商店街振興組合
副理事長

平松 博



「最近、北ぶらくり丁、賑やかになってきたね」

このところ友人や知人、お客様からそんな風に話しかけられることが増えてきました。長年ここにいる身からすると「そうなんですよ！」と答える時に自然と胸が弾みます。実際、今までなかつたような新しい店が出来て、若い年代のお客様も多くなっています。とは言え、通りが人でごった返しているわけでもなく、通行人は少々。これってまだ閑散としてると表現する方が正しいんじゃないのか？歩いてる人少ないやんか、どこが賑やかなんや！と突っ込まれるかもしれませんね。でも、もうちょっと観察の倍率を上げて通りを見てください。今ここで何かが起きている。それが見えてきます。

現状を整理すると、まず北ぶらくり丁商店街には店舗用地になり得る64戸分の建物間口があります。現在その内の約42%の27箇所が店舗ないしはそれに準じる用途で利用されています。それ以外には3箇所が駐車場として、5箇所が単独の住居として利用されています。残る45%ほどは空き家や倉庫などです。

通りは東西に3つのブロックに分かれていますが、本町通りに近い西側のブロックを見てみると、20箇所の75%に当たる15箇所が店舗として利用されていることが分かります。しかもその中の7箇所はコロナ禍以降に新しいオーナーが新規開店した店舗であり、行列が出来る店もあったりします。バブル崩壊以降の30数年来、北ぶらくり丁商店街が衰退していると感じることはあっても上向きになつてると感じるのは初めてのことです、これはまさに大事件です。

なぜ？ここに来て店が増えてきたのでしょうか？まず近年和歌山市が実施した「リノベーションスクール」「まちドリ」「チャッカソン」といったまちづくりの実践的なプログラムは、いずれも北ぶらくり丁商店街にとって具体的な出店につながるきっかけとなつたことが



挙げられます。また、まちづくり会社であるサスカッチさんの協力で2021年から毎週火曜日に実施してリメンバーマーケットというストリートイベントも出店のきっかけになっています。さらに「昭和レトロ」の盛り上がりもあります。北ぶらくり丁商店街を歩くと、あちこち店の看板や造作に昭和の面影を見ることが出来ます。

今の商売とは異なる先代の看板がそのまま残っていたり、木枠の昭和のガラス窓、琺瑯の看板、局番なしの4桁の電話番号、etc. 一つ一つ見て行くとよく今まで残ってたなあと感心する次第です。写真を撮りに来てる方も度々見かけます。

近年出店された方の多くはそんな流れを汲んで元のファサードを残すことを前提にして店作りをするようになってきました。インターネットの中では次々に生まれる最新のものに触れる機会も多く刺激に満ちていますが、この商店街の中ではむしろ「古いもん勝ち」みたいな状態で、面白い時代になったと思います。

そんな北ぶらくり丁は「商店街」の他に「北ぶらくり丁会館」と「北ぶらBASE」というスペースを運営しており、3者は昭和レトロなイメージを共有しながら全体のコンテンツをより充実したものにするために互いに欠かせない存在となっています。

北ぶらくり丁会館

中央のブロックを中ノ店通りに沿って本町公園方向に曲がると、すぐ左手に3階建ての古い建物があります。ここが「北ぶらくり丁会館」で、かつて商店街の若夫婦のために建てられた元アパートですが、ライフスタイルの変化や建物の老朽化もあって、2000年頃には住む人も使う人もなく空室のまま放置されていました。

しかしその一室をフリーペーパー Bravo の編集室として使い始めたことがきっかけで若者が集まり、空き部屋は次々と素敵な空間に生まれ変わり始めました。設備面でも、壊れていた廊下の柱を直し、その次は階段にペンキを塗って、今度は屋上の防水工事を、さらにはトイレをウォシュレットに、Wi-Fiを飛ばそう、看板も作ろうという具合に設備も整ってきて、次第にそれなりの雰囲気になって行きました。

この不思議な建物は一体なんだろう?という隠れ家的存在感も高まってきて、いつしか「古い」って悪いことじゃないと商店街のメンバーも感じるようになってきました。1階には堂々たる一枚板のカウンターを備えたBarが鎮座し、長年ヨーロッパ映画の配給に携わってきたオーナーが2年前にオープンしたミニシアターには他府県は元より海外からの来客もあり、オーストラリアから移住してきたオー



ナーのCafe、クラフトビール販売、ネイルサロンなど入居する方が増えてきて、2025年10月現在全ての部屋が埋まっています。元々ここに出店するのは北ぶらくり丁商店街の中よりは身軽なイメージですが、それぞれのオーナーさんの提供する商品やサービスのクオリティは高く、今や商店街にとっても欠かせない重要な存在になっています。

北ぶらBASE

北ぶらくり丁商店街の中程に、閉店して40年以上経過した古い木造の店舗があって、防犯上の理由から建物正面はパネルで覆われて中に入ることもできない状態のまま長年放置されていました。2022年春、この店を商店街に譲っていただける運びとなりました。

一体中はどんなふうになっているんだろう？ドキドキしながら入ってみると、何十年ぶりに表の世界に現れたのは、木の引き戸、琺瑯の看板、少し波打ったガラスのショーウィンド、ゼンマイ式の掛時計、そんな昭和が色濃く残るレトロな空間でした。

せっかく手に入った「身近な歴史遺産」です。少なくとも当分の間は誰もが気軽に使えるレンタルスペースとして運営してみようということになりました。僅かな費用（1日1,000円～）でアイデアを実際の形にして試してみることが可能です。



すでに多くの方にご利用いただいており、絵や作品の展示や販売、音楽鑑賞、漫才や落語、映画や映像の上映会、リラクゼーション、骨董市、手作り作品のワークショップ等々、ご利用になる方が次々と新しい使い方を考えてくれます。友達と集まっておしゃべりする場所として使う方や、この雰囲気の中で気分も変わって違うアイデアも浮かぶからと会議に使う方もいらっしゃいます。通常商店街は買い物をしたり食事したりする場所ですが、ここはどなたでもご利用いただけて、いつもと違う立場を体験することも出来ます。



これからの北ぶらくり丁商店街

私たちには2つの目標があります。1つは、商店街の空間を作り変えることです。具体的には、築50数年経過して老朽化したアーケードを撤去します。

北ぶらくり丁商店街は元々車両や人が単なる通過のために通つて行く要素が少ない通りだと言えます。幅員は約8mもあるので、単に買い物や飲食の通り道だけではなく、市民や来街者の皆さんのが快適に楽しく過ごせる空間として生まれ変わる余地は十分あると考えています。

2023年10月、アーケード撤去を前提とした道路空間を検討するための社会実験が実施されました。（主催：和歌山市）期間中はベンチやテーブル、椅子、パーゴラなどのストリー

トファーニチャーが大量に配置されて、それまでにない新しい風景が誕生しました。数メートル毎にボリュームのある植栽が配置されて、今までに見られなかった緑の空間は街並みにとって欠くことの出来ない魅力的な要素に見えました。

中央のエリアには大型円形のテーブルも置かれ、知らない人同士がコミュニケーションを持つきっかけとなることもありました。また人口芝エリアでは子供から大人まで寛ぐ様子も見られました。アーケードがなくなれば日差しや雨も受け入れる必要がありますが、木や草花など植物の育つ環境となり、人が集まったり、催しを行ったり、可能であれば椅子やテーブルを置いて一杯のコーヒーを味わうようなことができれば、市民や来街者にとって価値ある場所となり、生活に潤いをもたらしてくれるだろうと思っています。



2つ目の目標は、多くの方にわざわざ行きたいと思っていただけるような店の数をもっと増やすことです。現在、北ぶらくり丁商店街にはまだ多くの空店がありますが、建物の修繕が必要になる場合も多く、出店の希望者が現れてもすぐに貸せるところは僅かしかありません。最近になって、商店街組合やまちづくり会社が間に入り、建物の補修を引き受けるプランを試みたところ、一気に話が進むことが分かりました。今後空店解消の一つの形として積極的に取り組んで行きたいと思っています。

今後は商店街を構成する店は、特に飲食やサービスが増加していくと思います。しかしながら物販店についても、オリジナルの商品の開発が出来たり修理やメンテナンスに於いて特殊な技術を持つような場合はネット通販の時代でも必要とされています。出店される方には我々が知っている商店街での開業ノウハウや地域の情報を提供すると共にPR面でも応援していきます。地元の皆さんに親しまれ必要とされる店が集まれば、商店街は人の顔が見えるコミュニケーションの場として時代を超えて引き継がれていくことでしょう。

北ぶらくり丁商店街はそれが可能な場所として周辺地域と共に発展していかなければと思っています。